

# 子供の床屋

小川未明

青空文庫



町はずれに、大きなえのきの木がありました。その下に、小さな床屋がありました。円顔の目のくるりとした男が、白い上着を被て、ただ一人控えていましたが、めつたに客の入っているのを見ませんでした。なんとなく、みすぼらしく、それに狭苦し  
い感じがしたからでしょう。

勇ちゃんも、年ちゃんも、学校へゆくときはその前を通りま  
した。

「怖い顔をした、おじさんだね。」と、小さい声で勇ちゃんが

いました。

「僕のゆく床屋はきれいだよ、鏡が五つもあるよ、ここは、一つしかないね。」と、年ちゃんが、いいました。

「僕、こんなところは、いくら安くてもやだな。」

「もつと、きれいでなければね。」

「そうさ。」

二人は、学校から帰ると、原っぱでボールを投げて遊んでいました。

「いいかい、カーブを出すよ。」

「オーライ。」

そのうちに、ボールはころがって往来のそばの深いみぞの中

に落ちました。

「困ったね。」と、二人が下を見ていっているところへ、

「どれ、拾えないかな。」といって、顔を出したのは、思いがけない白い上着を被た床屋の主人でした。

「待っていないな、いま取つてやるから。」と、主人は、自分の家へ走つていって長いさおを持ってきました。そして、ボールをこちらへ寄せて取つてくれました。

「ありがとうございます。」と、二人は心からお礼をいいました。

主人の姿が見えなくなると

「いいおじさんだね。」と、二人は、顔を見合つて、につこりしました。

## 二

その後、<sup>のち</sup>四、五日<sup>にち</sup>たつてからです、<sup>いさむ</sup>勇ちゃんは学校へゆくとき<sup>とし</sup>に、<sup>む</sup>年ちゃんに向かつて、

「僕<sup>ぼく</sup>、昨日<sup>きのう</sup>、ここの床屋<sup>とこや</sup>で頭<sup>あたま</sup>を刈<sup>か</sup>つてもらつた。」と、<sup>とこや</sup>床屋の方<sup>ほう</sup>をふりむきながら、いいました。

<sup>きたな</sup>「汚くない？」

「狭<sup>せま</sup>いけれど、清<sup>せい</sup>潔<sup>けつ</sup>だよ。あのおじさんは、怖<sup>こわ</sup>い顔<sup>かお</sup>をしているけれど、やさしいよ。若<sup>わか</sup>いときは、<sup>ぐんじん</sup>軍人で、<sup>まんしゅう</sup>満洲へいったんだって、いろいろ戦<sup>せん</sup>争<sup>そう</sup>の話<sup>はなし</sup>をしてきかせたよ。」

「そうかい、僕も今度から、ゆこうかしらん。」と、年ちゃんは、  
いいました。

二人は、この床屋へゆくようになってから、おじさんと仲よし  
になりました。晩になると、えのきの木の下に、縁台を出して、  
三人は、腰をかけて、涼みながら、おじさんから、田舎で釣りに  
いった話や、また、夜川原に火をたいて、魚を寄せて、網ですく  
つた話などをききました。

「火をたくと、魚が寄ってくる？」と、勇ちゃんが、ききました。  
「そうです、その川は、小さな川でしたが、なまずの大きいのが  
いましたよ。」と、おじさんは、星空をながめて語りました。

「田舎へ、いつてみたいな。」と、年ちゃんが、いいました。

どこかで、ボーンと花火はなびの上あがる音おとがしました。きつと、徳とくちやんたちが、原はらっぱで上あげているのでしよう。けれど、そこへゆくよりか、おじさんの話はなしのほうがおもしろいのでした。

「私わたしのちいさい時じ分ぶんには、この、えのきの木きの実みをたまにして、竹たけで鉄砲てつぽうを造つくったものです。」と、おじさんは、夜風よかぜに、さらさらと葉はのそよいで鳴なる、えのきの木きを見み上あげました。

「あの、青あおい実みが、たまになるの？」

「いい音おとがしますよ。」

「こんど、僕ぼくにそんなてつぽうを造つくっておくれよ。」と、年としちやんが頼たのみました。

「おじさん、僕ぼくにもね。」と、勇いさむちやんが、いいました。



## 三

ふたり  
二人は、おじさんに、竹のてっぼうを造つてもらうことを約やくそく  
東くしました。

「田舎いなかは、やぶへゆけば、いくらでも竹があるが、ここでは、な  
かなか竹たけがありませんね。」と、おじさんは、考かんえていました。  
きれいな、大おおきな床屋とこやへいつて、この小ちいさな床屋とこやへこないほか  
の子供こどもたちは、なんとなく、この縁えん台だいにきて、腰こしをかけて、お  
じさんから、お話はなしをきくのを遠えん慮りしていましたが、いつのまに  
か、みんなおじさんと親したしくなつて、この床屋とこやへくるようになり

ました。

おじさんが、子供こどもが好すきだつたからです。そして、しまいに、  
 この床屋とこやは、子供こどもの床屋とこやという、あだながつくようになりました。  
 近所きんじよの子供こどもは、床屋とこやの前まえをいい遊あそび場ばしよ所にしました。おじさん  
 は、いつも元氣げんきで、小ちいさい店みせ先さきで、子供こどもたちの頭あたまを、ジヨキジ  
 ヨキ刈かつています。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「子供《こども》の床屋《とこや》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 子供の床屋

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>